

「見える化」活動構築の進め方

プロセスとメソッドの構築に関するケーススタディ

職業能力開発総合大学校 村上智広*

活動構築・定着化の要件

見える化活動は、具体的な製作物が次々と生み出されるモノづくりと異なり、活動の実態が把握しにくい傾向にある。また活動方法も手探りで構築する必要がある。このため、見える化活動の目的が妥当なものであったとしても、全員参加の取り組みに至らずその効果が限定的なものにとどまり、最悪の場合は立ち消えていくこともあり得る。

見える化活動は推進者を中心としつつ、関係者全員が意義をよく理解し、みんなで育て上げようという雰囲気を醸成することが重要である。

そこで、見える化活動のような新たな概念や考え方を具現化し、職場に定着させるための基本的な要件を筆者なりに整理しておく。

○要件1：哲学の構築

なぜ取り組むのか。あるいは取り組み理念や意義などについて、見える化推進者が確固たる哲学を持ち、熱く語ることができる。

○要件2：目標の明確さ

具体的目標が明確になっており、期待される取り組み効果が想定されている。

○要件3：プロセスの明確さ

見える化活動がどのような工程で進むのか分析されている。プロセスが明確にされていることで関係者は取り組みの全貌を容易に認識できる。

○要件4：メソッドの創意工夫

取り組む際のメソッドが工夫されており、便利な支援ツールなどの考案により、関係者全員が共同的に無理なく取り組めるものとなっている。

○要件5：日常業務との親和性

見える化活動と日常業務との親和性に十分配慮されている。見える化活動が非日常的な行為の場合、定着化は難しい。

○要件6：総括と公表

見える化活動の盲点が総括と社内への公表である。活動が軌道に乗ったからといって安心してはいけない。活動を立ち上げてから一定期間経過後、必ず導入効果を測定しその結果を社内に公表し、

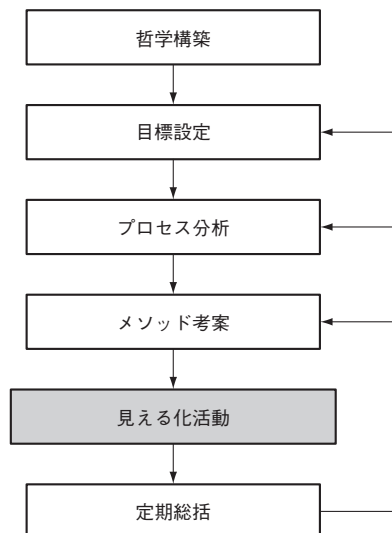


図1 「見える化」活動構築の標準フロー

*（むらかみ ともひろ）：能力開発専門学科准教授
〒252-5196 相模原市緑区橋本台 4-1-1
TEL：042-763-9005